

するのはそれであり、適正施肥ででん粉蓄積がよく、粉ふきいもになるのでなければいけない。堆肥のすき込みは土作りに欠かせないが、10a当たり2t以上は過剰で、含有するチッ素やカリによって肥大を刺激してでん粉価を低下させる。

土質改善と称して炭カル、珪カル、熔リンを投入するのは、土壌pHを上げ養分吸収を過剰にし、そうか病を蔓延するから、pHを5.0～5.5を目標に前作物に供給するよう勧める。肥料をある層の土壌に混入する装置をつけた

機械が開発されているが、これは肥料が効き難く多肥になりがちだから良くない。

この項について苦言を呈するなら「肥料代がその効果の割には安価に過ぎるため、安易に多投する風潮があり、道の標準施肥量は空文化している。しかし肥料は有限資源だし、過剰に投下すれば生育の異常をおこすばかりでなく、作土は塩類集積土壌化することを考え、可能なかぎり制限して使用すべきである」となる。

——次号に続く——



じゃがいもきれぎれ話

日本種馬铃薯協会顧問 塩田 弘行

1 男爵薯の碑

先日、久方ぶりに北海道南部地方に出かける機会があり、函館の五稜郭公園を訪れた。史跡をしのぶ大勢の観光客がそぞろ歩きをしていたが、公園の裏口、橋の傍らに建てられている「男爵薯を讃ふ」の大きな記念碑には人々が気づかない。寂しい限りである。建設当初には、正門の傍にあったのが、観光客が多勢になったので、後年混雑防止のため移設されたのである。

馬铃薯は北海道の代表的味覚の一つであり、広々とした原野での花盛り風景は、ロマンに満ちた風物詩である。馬铃薯には多くの品種があるが、男爵薯は其中で忘れることの出来ない主要な品種である。米国原産のアイリッシュ・コブラーという品種を、英国のある商社が米国より明治40年（1907年）に輸入し、それをさらに、たまたま当時英国に滞在していた函館ドック会社の社長であった川田男爵

が日本に持ち帰って、函館近郊七飯村（当時）の自家農場に試作させたのが、日本における栽培の最初とされ、その時期は明治40年以降と推測される。当時農民は、薯本来の品種名がわからず、川田男爵が持ち込んだから男爵薯と呼んだとされている。

そして、川田男爵の自家農場のあった場所、国道5号線七飯町鳴川、末だ100年以上の老赤松が多数残っていると言う名所松並木の傍らに「男爵薯発祥の地」の記念碑が建っている。この碑を知り訪れる観光客が殆んどないとのこと、これまた淋しいことである。

この「賛ふ」と「発祥の地」の2つの大きな石の記念碑の碑文は、何れも戦後に設立されたのであるが、当時北海道帝国大学総長であり、植物病理学者として世界的に著名な伊藤誠哉先生の筆である。

男爵薯が日本に導入されてから80年近くも経過し、当初、栽培は渡島地方に限定されて

いたのが、後志、檜山、その他各地に拡大され、その間に、昭和3年には奨励品種となり普及され、末だに食用薯としての評価が高く、さらに本州各地への種薯移出の王座を保っている。

現在でも、全国的には40%近く、馬鈴薯の主産地である北海道においても20%を占める作付があることを忘れてはならない。

2 男爵薯と啄木

馬鈴薯の花盛りの頃は、北海道観光における風物詩の一つとされていることは周知のことである。北海道新聞の「卓上四季」と言うコラム欄に、石川啄木の詠んだ「馬鈴薯のうす紫の花に降る雨を思へり都の雨に」を取り上げて「啄木が心ひかれた花は、おそらく男爵だろう」と書かれていた。

馬鈴薯には、当時でも多くの品種があったが男爵薯という品種は、明治40年ごろ、アメリカからイギリスに輸入され、それを当時イギリスに滞在していた函館ドック会社の社長であった川田男爵が日本に持ち帰って、函館近郊に僅か試作したのであって、当時まだ広く普及栽培されてなく、人目につく機会は少なかったと思う。

他方、啄木は明治40年5月「石もて追われるごとく故郷を出て」津軽海峡を渡って函館に来たが、同年9月にはその函館も離れ、札幌、小樽、そして41年1月釧路、さらに同年4月には上京、東京暮らしの中で、43年12月に、処女歌集として「一握の砂」を刊行したのである。

「馬鈴薯のうす紫の」歌は、この歌集の中に収められているが、年月を追求してみると、啄木が男爵薯の花に接した機会があったかどうか、詠んだ馬鈴薯が、果たしてこの品種で

あったかどうか疑問が生じ、断定は出来ないと考える。

実は、私自身もかつて、単純に考えてある雑誌の学芸欄に寄せた啄木と馬鈴薯に関する随筆の中で、「“馬鈴薯うす紫の花”の歌は、当時、栽培されていた品種は白い花のものが多かったが、うす紫の花が咲くのは男爵薯と考えられ、詩人の鋭い感覚で、詩情にあふれ、良く観察されていると思う」と書いたことがあるが、この考えは間違っているかもしれない。

3 馬鈴薯を食べる人びと

「バン・ゴッホの1885年（明治18年）の作品である“馬鈴薯を食べる人びと”の印刷されているカラーの原画を生で鑑賞する機会を得ることは、私の実現されそうもない一つの夢としておきたい。」

これは数年ほど前、ある雑誌に“馬鈴薯あれこれ”と書いた駄文の末尾の一節である。

先年、ヨーロッパの農業事情、特に馬鈴薯栽培を中心とした研修で、十勝管内農協の馬鈴薯関係者と共々、短期間ではあったが、フランス、イタリア、西ドイツ、スイス、オランダの国々を巡る機会を得た。

限られた日程のため観光めいた思い出は何一つ残さず、事前に決められていたプログラムに従い、各地現場での研修に追われる気ぜわしい毎日だった。ところが、オランダでたまたま予定していたある研究所が先様の都合で中止になり、空白になった午後のひと時を利用して、北海道大学農学部小島博士の案内でクレラー・ミュラー美術館を訪れることになった。小島博士は植物ウイルス病の専門家で、当時ワーゲンニンゲン農科大学の留学中の人、また詩と絵を解し、ゴッホを愛するロマンチ

ストでもあり、すでに数回この美術館に足を運んでいた。

同美術館は初めある女性富豪の所有であったが、その後政府が買いとったもので、アルンヘルム郊外オッテルロー国立公園内の森の中、静かな緑に囲まれて建っていた。

ここには有名な画家の作品が数多く収められていたが、ゴッホのコーナー、特に“馬鈴薯を食べる人びと”はほどよい照明と静寂な部屋の中に掲げられていた。この絵の前に立った時、コマーシャルの一句になっている「ほんものにふれる。そんなひと時を大切にしたい」の言葉どおり、念願かなった感激で、顔は上気し、ほてり、自然に身震いするのを抑えることが出来なかった。大学卒業以来馬鈴薯栽培研究一筋に取り組んで三十余年、私なりにたどりついた感激である。同行の者にせき立てられて一度は立ち去ったが、再び舞い戻り、この絵の前で時間がたつのも忘れていた。「人間の苦しみは生きているものだ」という言葉を残して自殺を実行し、悲惨な生涯を終えたゴッホが画家として立ったのはわずか10年の期間だったが、その画風は極めて特異な変化に満ちたものといえよう。

“馬鈴薯を食べる人びと”はパリ時代の明るいものと異なり、好んで静物や農民を描いていたヌエネン時代初期の大作で、感動的な逸品である。きびしい農作業を終え、すすけた壁に囲まれた部屋の暗いランプの灯の下で、5人の家族の、ただ馬鈴薯とコーヒーだけという貧しい夕食時の風景は、当時の農民の生活をそこはかとなく表現しているものであり、外見的には近代化されたとみえる現在の農民生活の中にも、あながいこうした情景が潜在しているのではないかと感じさせる。

「農民が土を耕すようにゴッホはキャンバスを耕す」という彼の情熱の表れがこの画面ににじみ出ている。

帰国に際し、美術館で買い求めたこの絵の複写がわが家の居間にかけられ、旅行の一番強烈な思い出となっている。

また、“馬鈴薯を食べる人びと”にはもう1枚の絵がある。それはアムステルダム国立ゴッホ美術館にあるもので、これも本物。構図はほとんど変わらないが、部分的なこまかい点でいくつかの異なった描写がみられるとのことである。

4 中国黒竜江省にて

先年の夏、中国黒竜江省に農業、特に馬鈴薯関係のある各研究機関を訪れ、見学及び講義するという旅を続けてきた。

専門的な収穫は多く、それらについては、別に報告する機会を得たいと思うが、この旅で貴重な人生体験を数多く得た。

今回訪れた場所の一つ北安は、市制を行なっているが、決して整った衛生的であるとは見られなかった。でも平家建の赤レンガの家並などは、旅人にとっては、中国的な風情に満ちた落付いた街の印象であった。

今回訪れた場所の一つ北安の農墾研究所は馬鈴薯、大豆などの作物の栽培試験を行なっている国営農場である。私達が戦後訪れた初めての日本人とのことで、熱烈歓迎を受けた。しかしその反面、この地区にある多くの国営農場は、戦時中、日本からの開拓移民が住んでいた所であったが、その以前は吾々が長年苦勞して耕した農地であって、移民によって強制的に奪われた土地であると語られたのには、非常に胸の痛む思いになった。

奪われし土地は還りて楽土なり広き農地

に佇つ農は言ふ
残留孤児の問題も、各地で聞かされたが、
中国の通訳はあまりこれに触れたがらなかつた。しかし北安などでは現実に接し、見聞したので、これを詠んでみた。

北安の農婦寄り来て声高に日本人なりと
訪へて言ふ

養父母の三度変りて名も国も忘れたりと
て日本妻は言ふ

帰国をば子と夫拒むと話しかく日本妻あり
吾はすべなく

残留孤児問題に言及することは慎重でなければならぬ。私自身も、戦後台湾から親子

共々無事に引き揚げた者なので、孤児達の心情は十分理解できる。

親さがしに、来日される残留孤児は陽の当たる場所の方々であり、今の東北三省地区、特に北満と言われた黒竜江省には、まだまだ多くの孤児が、その中には日本人であるかどうかさえ全く不明のままの孤児が、決して豊かとは言えないが一応安定した生活をしている。言葉の問題、生活の問題を考えると、日本に帰ること、特に永久帰国が果たして幸福なのかどうか、単直に判断し結論を出すことの困難さを感じた。この章は、馬鈴薯からいささか離れた拙文になったが一筆追記。

ベニコマチのふるさと栗源(くりもと)の いもまつり

千葉県香取農業改良普及所多古支所 北崎 順一

1. はじめに

千葉県香取郡栗源(くりもと)町は、新東京国際空港のある成田市から車で20分位の所にある、人口5千人足らずの小さな町です。

栗源町は、関東ローム層からなる北総台地の一角にあり、台地畑では、古くからサツマイモが作られてきましたが、今では、隣りの佐原市、大栄町、多古町などとともに、全国でも有数の食用かんしょの一大産地を形成しています。〈図Ⅰ〉

2. サツマイモ栽培の過去・現在

戦後の食糧難を救ったサツマイモも、デンブンかんしょ全盛時代を経て、40年代のコーンスターチ輸入によるデンブunkんしょの急激な衰退とともに、食用かんしょが栽培の中心になって来ました。昭和30年代後半～40年代前半には、埼玉県川越地方より金時の種い

もを積極的に導入しております。

40年代以降、市場出荷用の食用かんしょが主力となり、皮色・肉色・形・味・揃いなど、

図Ⅰ 千葉県における栗源町のかんしょの位置
(昭和60年産、作付面積)
香取郡市：55%

